

平安京左京一条三坊六町  
旧二条城跡

2012年

古代文化調査会

平安京左京一条三坊六町  
旧二条城跡

2012年

古代文化調査会

## 例　　言

1. 本書は、古代文化調査会が京都市上京区下立売通西入東立売町209番地において、マンションの建設に伴い実施した平安京左京一条三坊六町・旧二条城跡の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は東京建物株式会社より委託を受けた古代文化調査会の上村憲章が担当した。
3. 調査にあたっては、京都市文化市民局文化財保護課の指導を受けた。
4. 本書の編集・執筆は上村がおこなった。
5. 図面及び遺構・遺物の整理、遺構の製図は上村がおこない、遺物の実測・製図は板谷桃代、水谷明子がおこなった。
6. 本書で使用した方位及び座標の数値は世界測地系（新測地系）平面直角座標系VIによる。記載した数値はm単位で、水準はT.P.（東京湾平均海面高度）である。
7. 本書で使用した地図は、国土地理院発行の25000分の1（京都西北部・京都東北部）、京都市都市計画局発行の2500分の1の地図（聚楽廻、御所）を調整し、使用した。
8. 土壌及び土器・瓦類の色調の表記は、農林水産省農林水産技術会議事務局監修『新版標準土色帖』に準じた。
9. 遺物番号は実測図・写真ともに共通している。
10. 発掘調査及び遺物整理に際して、下記の方々の御指導・御協力を得ることができた。記して感謝の意を表します。（所属・敬称略、五十音順）

網 伸也　家原圭太　石田志朗　内田好昭　宇野隆志　馬瀬智光　柏田有香  
北田栄造　幸地浩一郎　坂本純哉　鈴木久史　高橋康夫　中井 均　西森正晃  
長谷川行孝　堀 大輔　南 孝雄　宮原健吾　毛利憲一　山本雅和  
(株)明輝建設 (株)大高建設 (財)京都市埋蔵文化財研究所 東京建物 (株)  
(有)京都編集工房

## 本文目次

平安京左京一条三坊六町・旧二条城跡

I 調査の経緯	1
II 調査の経過	1
III 遺構	4
IV 遺物	13
V 小結	17

## 図版目次

図版1 遺跡	1 調査地近景（北東から）
	2 第1面全景（北東から）
図版2 遺跡	1 第2面全景（北東から）
	2 第3面全景（北東から）
図版3 遺跡	1 濠21（北から）
	2 濠21（南から）
図版4 遺跡	1 第3面西部（北東から）
	2 井戸56（西から）
図版5 遺跡	1 石組15（南西から）
	2 溝13（南から）
	3 柱穴36（北から）
	4 柱穴119（前）・120（奥）（南から）
	5 柱穴34（南から）
	6 柱穴159（南から）
	7 土壙91（北から）
	8 現場説明会（南西から）
図版6 遺物	井戸56・柱穴184・柱穴36出土遺物
図版7 遺物	濠21出土遺物

図版8 遺物 井戸1・井戸3出土遺物

図版9 遺物 井戸3・井戸56・濠21出土遺物

## 挿 図 目 次

図1	調査地点位置図	1
図2	調査地位置図	2
図3	平安京条坊と調査地位置図	2
図4	四行八門と調査位置関係図	2
図5	井戸56断面実測図	4
図6	北壁実測図	5
図7	南壁・東壁実測図	6
図8	第1面平面実測図	7
図9	第2面平面実測図	8
図10	第3面平面実測図	9
図11	濠21中央セクション実測図	12
図12	石組15実測図	12
図13	井戸56出土土器実測図	13
図14	柱穴184出土土器実測図	14
図15	柱穴36出土土器実測図	14
図16	濠21出土土器実測図	14
図17	井戸1出土土器実測図	15
図18	井戸3出土土器実測図	15
図19	出土瓦拓影・実測図	16
図20	出土石製品実測図	16
図21	旧二条城推定復元図	17
図22	濠21の追跡調査	18

## 表 目 次

表1	遺物概要表	16
表2	掲載土器一覧表	19



# 平安京左京一条三坊六町 旧二条城跡

## I 調査の経緯

調査地は京都市上京区下立売通西入東立売町 209 番地である。当地は周知の遺跡、平安京左京一条三坊六町跡、および旧二条城跡に該当する。ここにマンションの建設が計画され、京都市文化市民局文化財保護課による試掘調査の結果、土壌などの遺構の存在が認められた。発掘調査は、京都市の指導のもと施主との協議の結果、当調査会が 2012 年 5 月 14 日より発掘調査をおこなうこととなった。

## II 調査の経過

敷地は平安京左京一条三坊六町の南東部にあたる。北側は近衛大路、南側は勘解由小路、東は室町小路、西側は町尻小路に囲まれた町である。調査地は同町の西三行北八門のほぼ東半部を占めている。勘解由小路の施設が確認できる位置までは及んでいない。当六町を含む三町～六町は、修理職の厨町である修理職町の敷地であった。修理職は宮城の修理を担当する役所であり、その

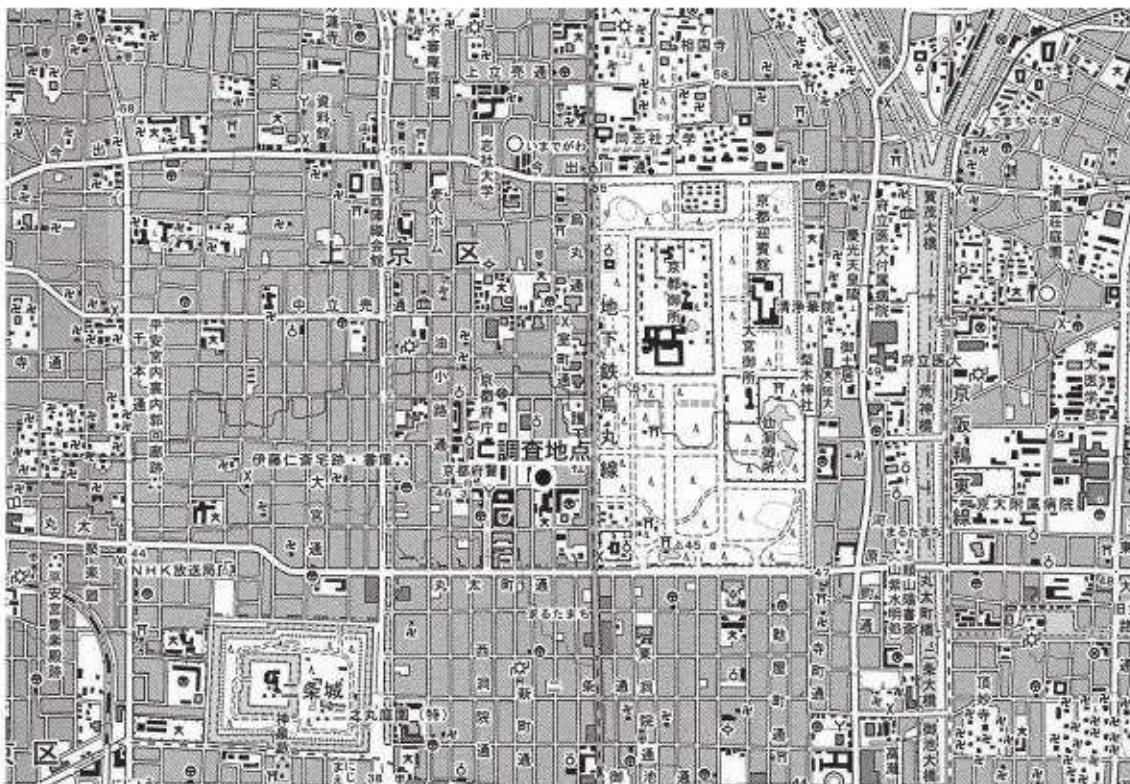


図 1 調査地点位置図(1/25,000)

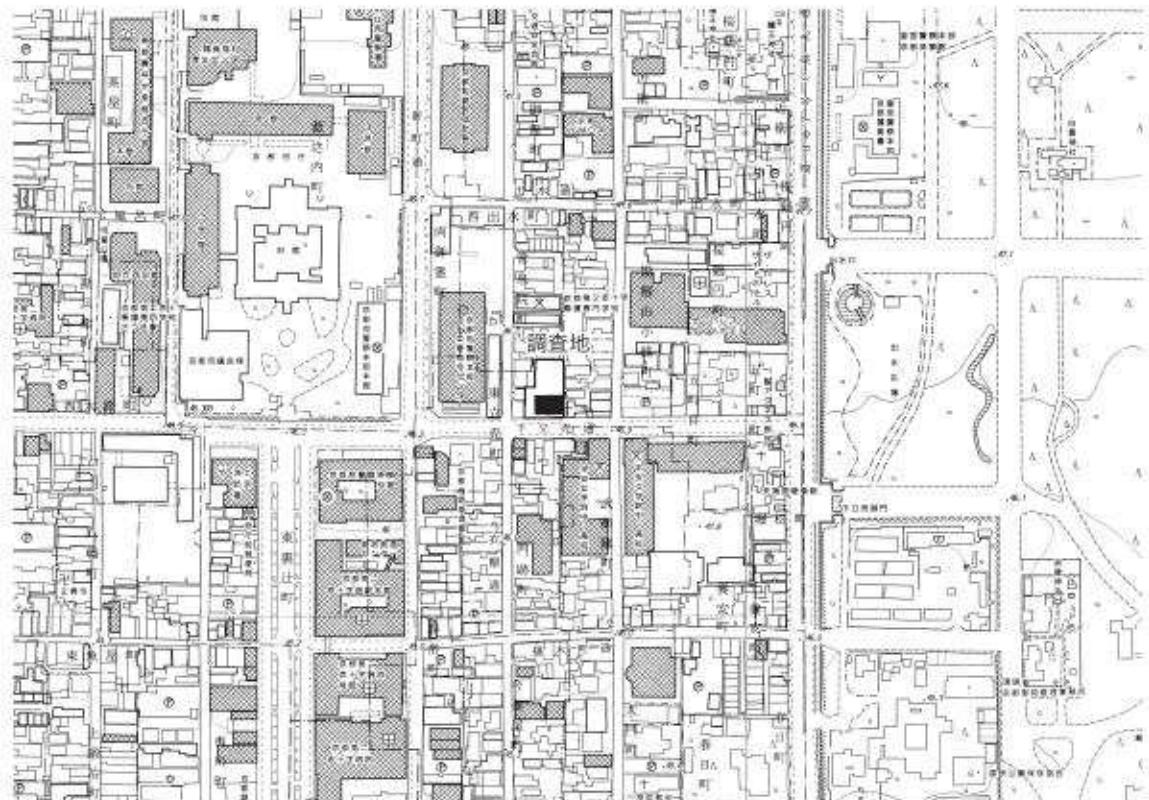


図2 調査位置図(1/5,000)

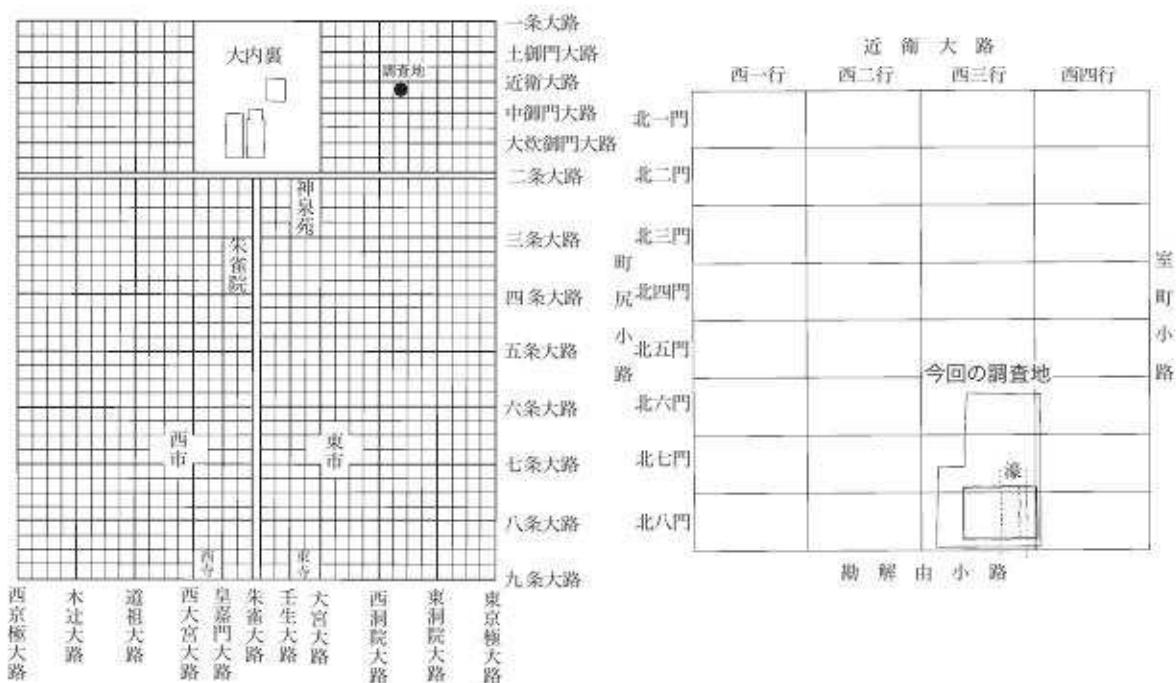


図3 平安京条坊と調査位置図

図4 四行八門と調査位置関係図(1/2,000)

厨町には多数の工場や倉庫が立ち並んでいたといわれている（『為房卿記』応徳2（1085）年11月28日条）。寛治元（1087）年や康和5（1103）年には、修理職町は火災で焼失している（『中右記』寛治元年2月12日条、『本朝世紀』康和5年正月9日条<sup>注1</sup>）。

また、当地は信長が室町幕府第15代将軍足利義昭のために築造した「旧二条城」の推定域にも含まれている。室町管領でもあった斯波氏の京屋敷である武衛陣第を、永禄7（1564）年第13代将軍義輝が再興し御所として使っていったが、永禄8（1565）年松永久秀と三好三人衆が主君・三好義継とともに足利義栄を奉じて謀叛を起こし、武衛陣第を軍勢を率いて襲撃した。義輝は奮戦したが討死する。信長は、永禄11（1568）年将軍義昭を奉じて上洛、翌永禄12（1569）年空き家となっていた武衛陣第を利用して城館を造った。これが後に「旧二条城」と呼ばれた城である。当時の史料では「しろ」「武家御城」「公方之御城」「武家御所」「公方様御構」「御構」等と呼ばれていると言<sup>注2</sup>う。

ポルトガルの宣教師ルイス・フロイスは、当時京都に居てこの築城の様子を書き残している。信長は陣頭指揮にたち、石垣の石材として石仏を使ったことや、三町（三街）の広さがあること、二重の濠があること、急造にもかかわらず「はなはだ完全に造られた非常に美しく広い中庭があった」と言い、また驚くべきこととして通常は2万5千人、少ない時でも1万5千人を動員し、70日間と言う短期間で完成させたと記している。<sup>注3</sup>

元亀4（1573）年4月、信長の上京焼打ちの延焼を免れるも、義昭は信長に叛き宇治の楓島城に移り城は主を失い荒れることとなる。天正4（1576）年、安土城建設のために城を破却し資材を近江へ運び去り、同年上京衆に命じ濠を埋めさせ、築城からわずか7年で姿を消すこととなる。<sup>注4</sup>

旧二条城の遺構は、1975年2～3月に地下鉄烏丸線建設時の調査で、櫛木町交差点上ルで南面する石垣、犬走りと濠の一部が見つかったのを始めとして、出水、下立壳、丸太町上ルの合計四ヶ所で濠が発見された。一番北の出水と、南の丸太町上ルのものを取り込んで外郭の濠（外濠）の復元がされ、規模は南北380mほどになる。<sup>注5</sup>

調査は平成24（2012）年5月14日から同年7月14日までの間、調査面積260.55m<sup>2</sup>を3面にわたって行った。6月28日に記者発表、30日に現地説明会を実施した。

なお、調査の方法としては、（財）京都市埋蔵文化財研究所が作成した平面直角座標系VIによる平安京の復原モデル60を使用し、4mメッシュのグリッドを設定し、遺構遺物の記録をとる方法をおこなった。

平安京左京一条三坊六町の築地四隅の座標値（新測地系）はそれぞれ以下の通りである。

北西	X= -108,573.50m	北東	X= -108,573.01m
	Y= -22,212.54m		Y= -22,093.16m
南西	X= -108,692.89m	南東	X= -108,692.40m
	Y= -22,212.06m		Y= -22,092.67m

### III 遺構

敷地南部の表土は標高 46.7 m で敷地北部で 10 数センチ高くなる。北壁第 40 層、南壁第 21 層、東壁第 32 層が近世前半期の土層である。これらの土層を除去すると地山（自然堆積層）の上面となり各遺構が現れる。地山は黄褐色系の砂泥層が 10 ~ 90cm ほどで不均一に堆積し調査区西側で厚い。砂泥層の下には良く締まった 10YR4/3 にぶい黄褐色の砂礫層が堆積している。

#### 平安時代

平安時代の遺構は柱穴が中心で、他に井戸が 1 基ある。

##### 柱穴 63 (図版 2 の 2・4 の 1、図 10)

今回の調査の中で最も古いもので 9 世紀後半から 10 世紀前半に位置づけられる。5B 区で検出。掘形は径 0.40m 程で、径 0.20m 程の柱当りが確認できた。深さは検出面から 0.24m である。10YR4/2 灰黄褐色砂泥が堆積する。平安京 II 期～Ⅲ 期古<sup>註 7</sup>の土器が出土している。

##### 柱穴 44 (図版 2 の 2・4 の 1、図 10)

5A 区で検出。柱穴 115・170 等に切られしており規模の詳細は不明。深さは 0.10m を測り、10YR4/2 灰黄褐色砂泥が堆積する。平安京Ⅲ期に属する土師器、須恵器甕・壺、黒色土器 B 類椀等が出土する。10 世紀代の遺構と見ている。

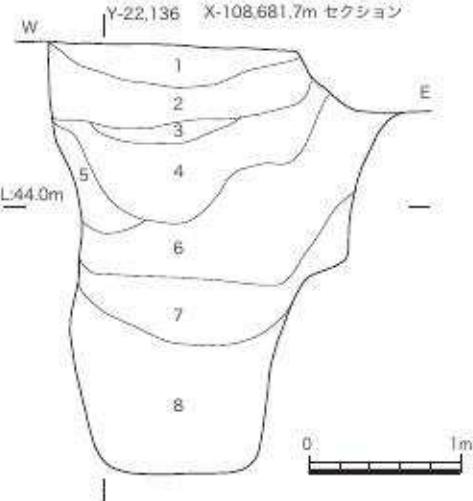
##### 柱穴 117 (図版 2 の 2・4 の 1、図 10)

5A 区で検出。掘形の径は 0.38 ~ 0.40m、深さ 0.46m を測り 10YR4/2 灰黄褐色砂泥が堆積する。少量ではあるが平安京Ⅲ期に属する土師器、須恵器杯 A・甕・壺、綠釉陶器椀、灰釉陶器椀、黒色土器甕、平瓦片等が出土した。10 世紀代の遺構と見ている。

他に 10 世紀代と見られる遺構は柱穴 58・74・166 があり調査区北西部に偏在する。

##### 井戸 56 (図版 2 の 2・4 の 1・2、図 5・10)

平面形は南北 1.8m、東西約 2.2m を測り、深さは検出面から 2.85m あった。南西部分は井戸 2 に一部切られている。東辺には上から約 1.5m のところで幅 0.25m 程の段がつく。井戸枠等を組み立てる為の足場となっていたとも解釈できるが、木枠等の施設は廃棄時に撤去されたものと見られ残存していない。堆積土は 8 層に分層でき、平安京Ⅳ期の土器群が出土している。11 世紀代後半に埋



- 1 10YR3/2 黒褐色砂泥、10YR4/4 黄褐色砂泥ブロック混（炭、土師器片、須恵器片混、φ0.5~15cm 大の礫混）
- 2 10YR2/3 黑褐色泥炭（炭、土師器片、須恵器片混）
- 3 10YR2/3 黑褐色泥炭、10YR4/3 にぶい黄褐色砂泥（炭、土師器片、瓦片混、φ1~10cm 大の礫混）
- 4 10YR3/2 黑褐色砂泥（炭、土師器片、瓦片混、φ0.5~10cm 大の礫混）
- 5 10YR3/3 灰褐色砂泥、10YR5/4 にぶい黄褐色砂泥（地山ブロック）混
- 6 10YR3/2 黑褐色砂泥、10YR5/4 にぶい黄褐色砂泥（地山ブロック）混（炭、土師器片、瓦片混、φ0.5~8cm 大の礫混）
- 7 10YR3/3 灰褐色砂泥、10YR4/6 黄褐色砂泥（粘質）（炭混、φ2.0~7cm 大の礫混）
- 8 10YR3/1 黑褐色シルト、10YR3/3 灰褐色砂泥混（炭混、φ0.5~8cm 大の礫混）

図 5 井戸 56 断面実測図 (1/50)

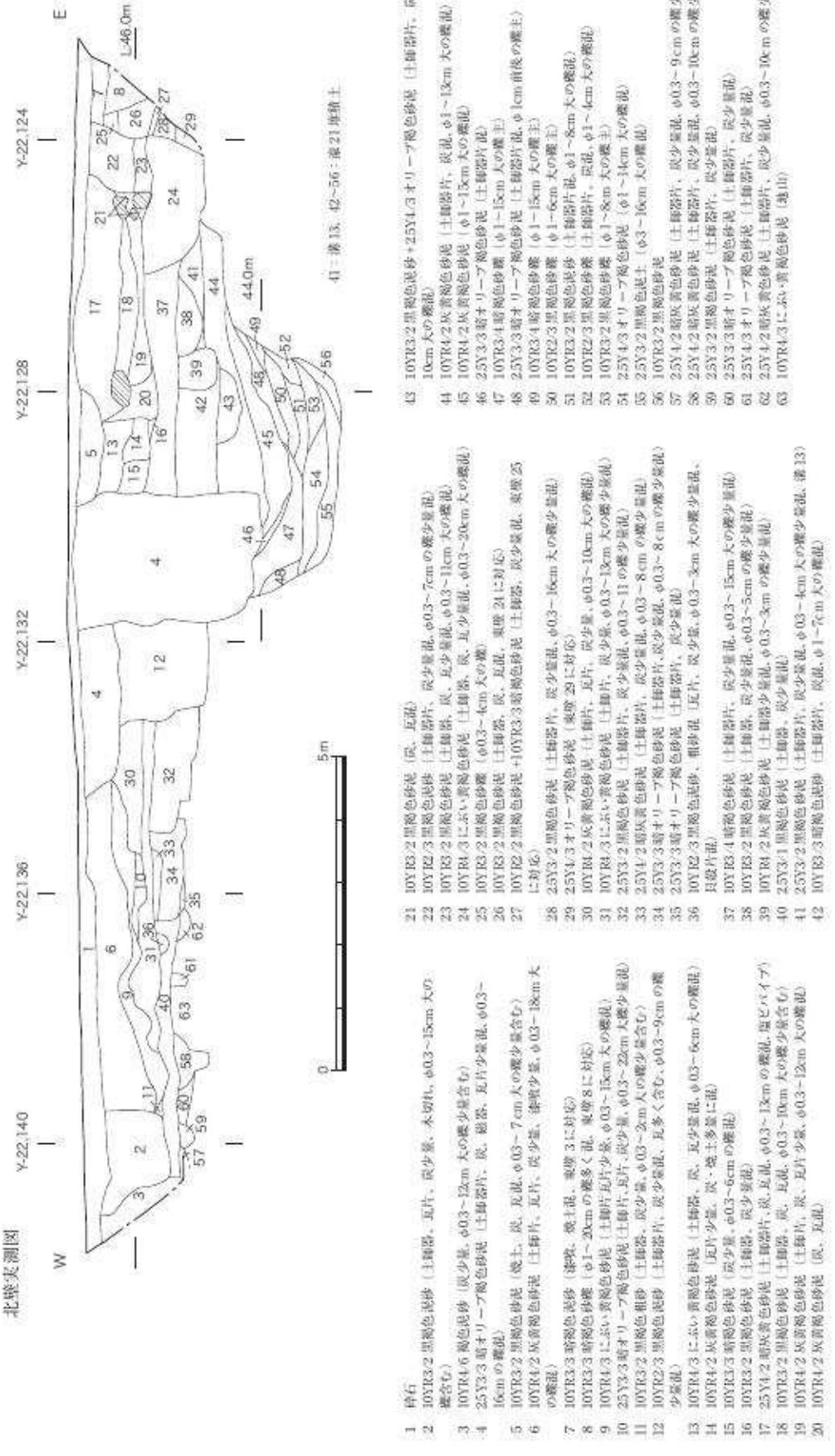


図6 北壁実測図(1/100)

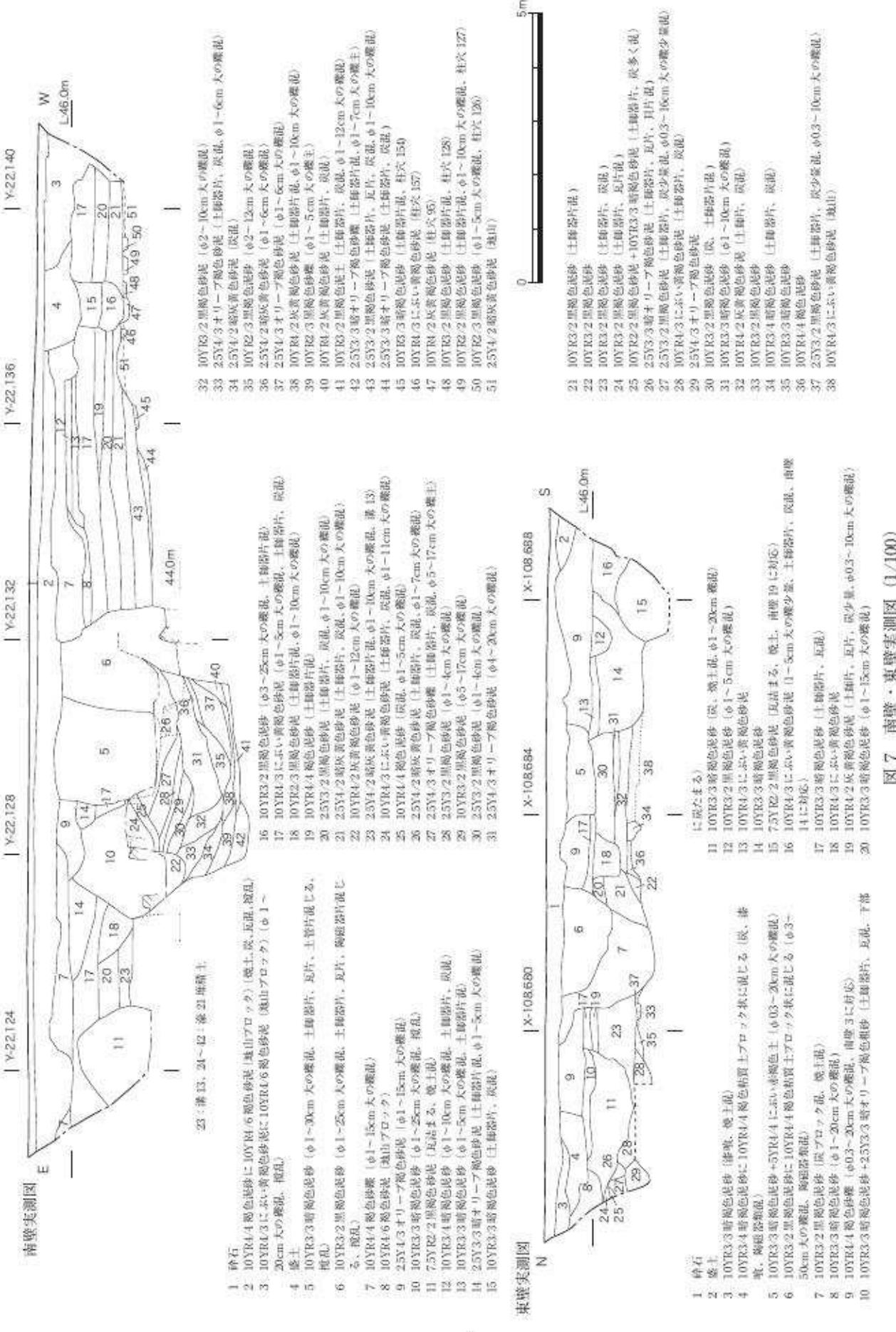


图7 嘉興·東湖春曉(1/100)

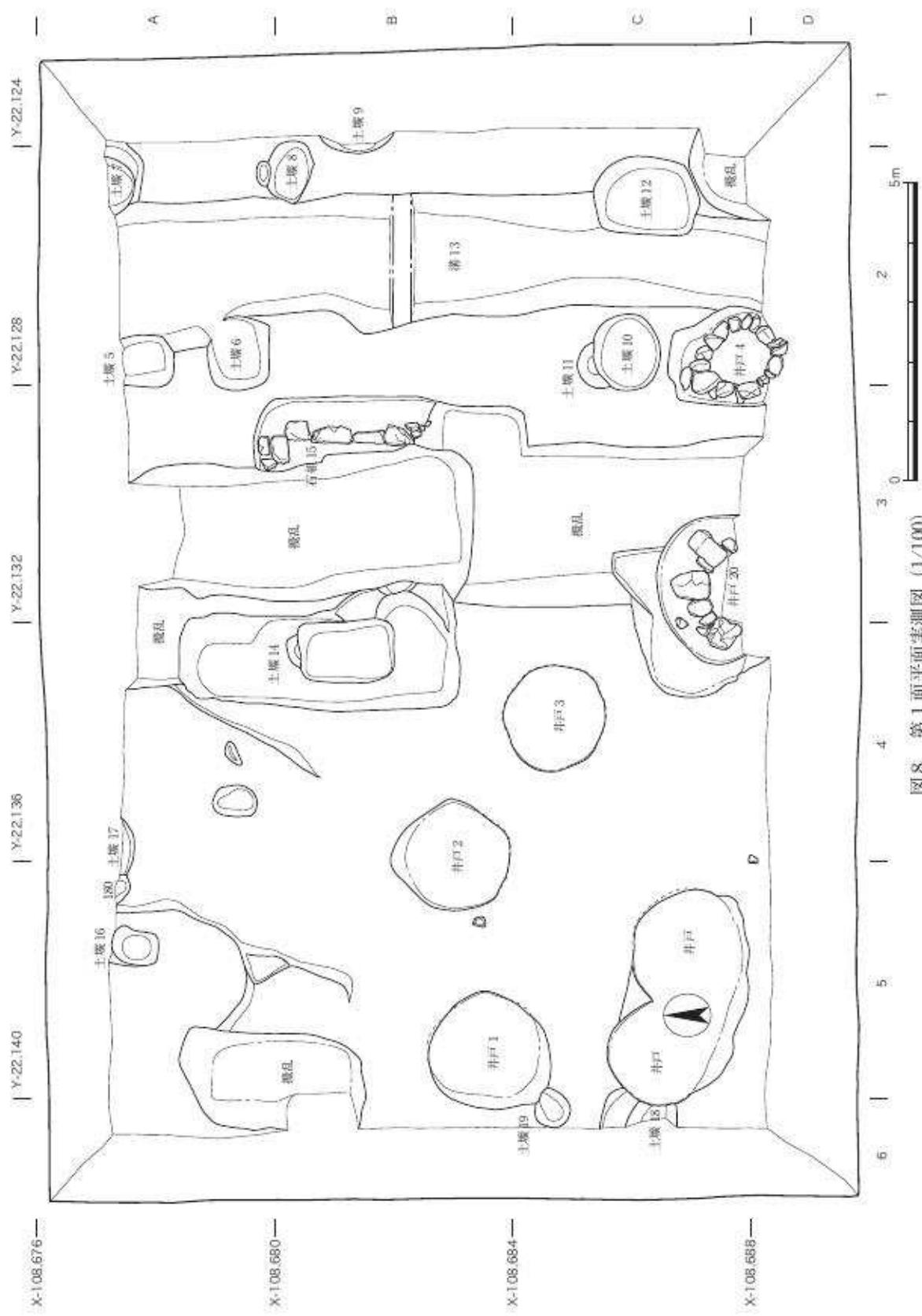


图8 第1面平面实测图(1/100)

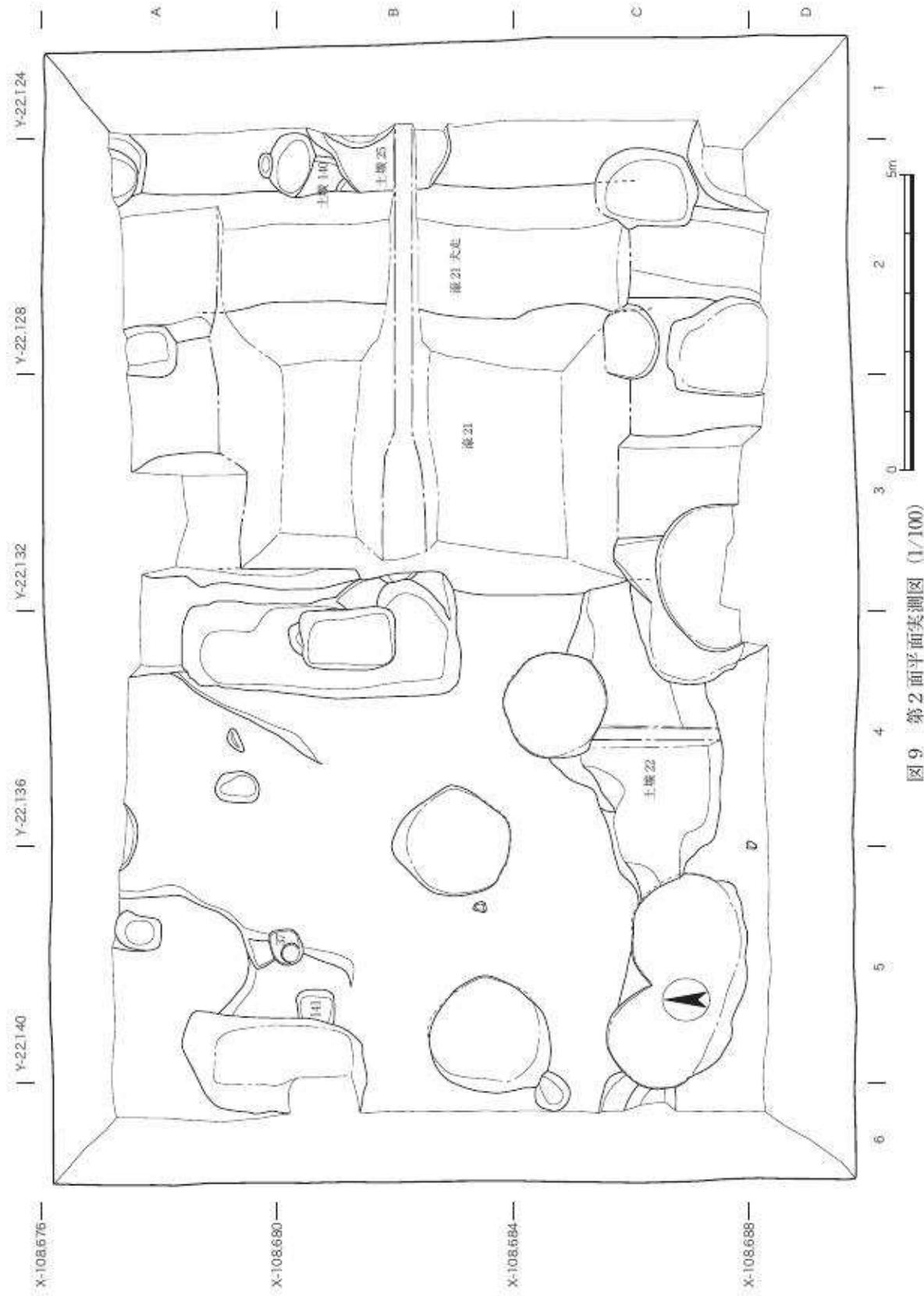
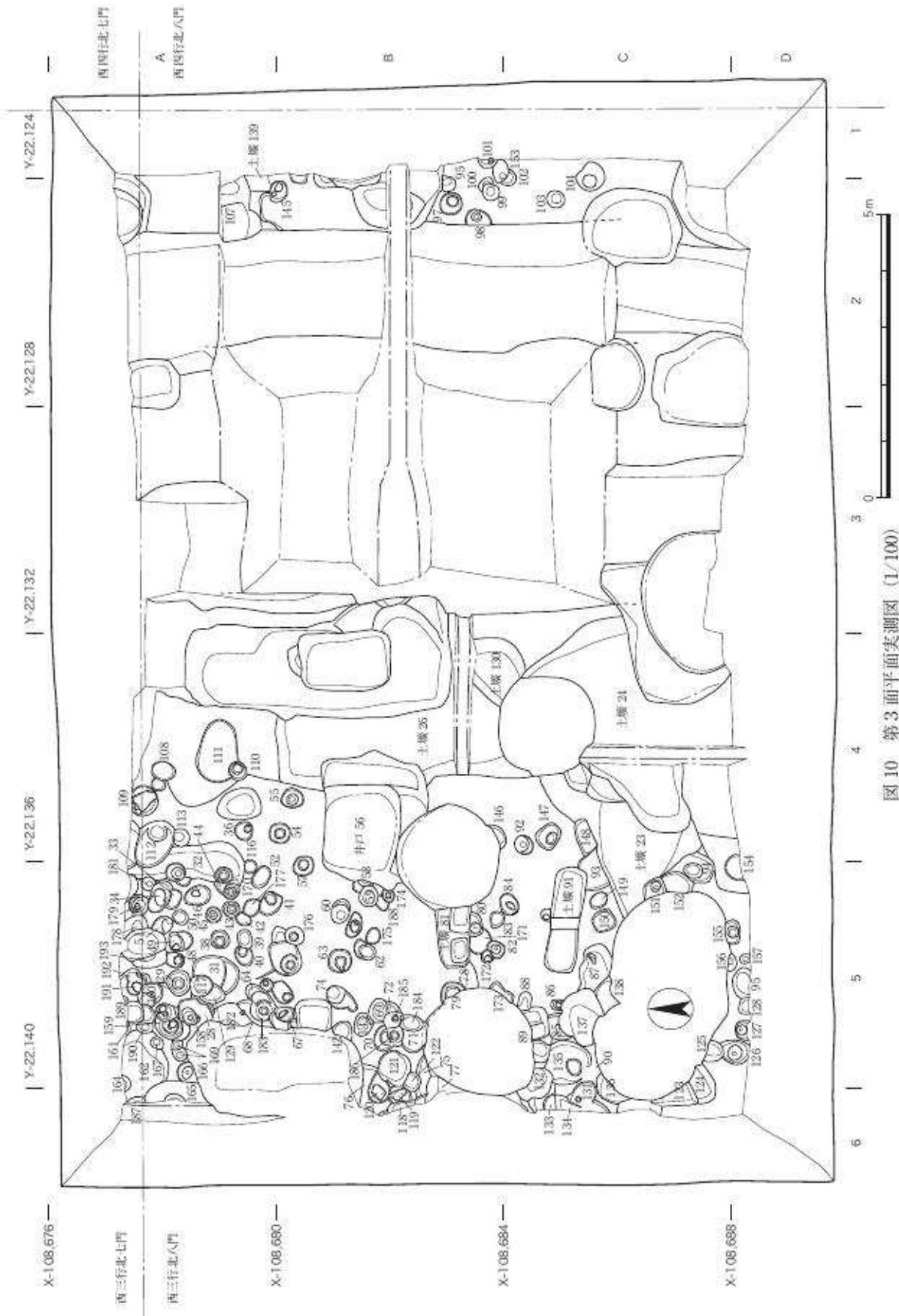


图 9 第 2 面平面实测图 (1/100)



まったくものと理解している。

#### **柱穴 43 (図版2の2・4の1、図10)**

5A区で検出。掘形は径0.31mの円形で、径0.16m程の柱当りも確認できた。深さは0.24mで、10YR4/3にぶい黄褐色砂泥が堆積し、掘形は10YR3/3暗褐色砂泥が認められた。平安京IV期の遺物が出土。11世紀代の遺構である。

#### **柱穴 55 (図版2の2・4の1、図10)**

4B区で検出。掘形は0.35～0.40mのやや崩れた円形で中央部に径0.20m程の柱当りが認められる。深さは0.56mを測る。10YR3/3暗褐色砂泥、掘形には10YR4/3にぶい黄褐色砂泥が堆積する。11世紀代の遺構である。

#### **柱穴 67 (図版2の2・4の1、図10)**

5B区で検出。掘形は径0.36～0.28mの南北に長い円形で、検出面から0.30mのところに0.16×0.10mくらいの大きさの根石を入れている。深さは0.52mを測った。10YR3/2黒褐色砂泥、10YR4/3にぶい黄褐色砂泥等の土が堆積していた。土師器皿、須恵器甕、灰釉陶器椀、瓦器椀等、平安京IV期の遺物が出土。11世紀後半代の遺構である。

この他11世紀代と見られる遺構は柱穴28・42・59・64・71・80・84・135・136・151・159東・170・181～3・185・186があり、11世紀後半から12世紀前半と見られる遺構には柱穴34・60・179・184がある。

#### **柱穴 38 (図版2の2・4の1、図10)**

5A区で検出。掘形は径0.34×0.32mの円形で、西寄りに径0.20m程度の柱当りがある。深さは検出面から0.28mで10YR4/3にぶい黄褐色砂泥が堆積する。少量であるが平安京V期の土師器皿が出土している。12世紀代の遺構と見ている。

#### **柱穴 45 (図版2の2・4の1、図10)**

5A区で検出。掘形は径0.28×0.30mの円形で、中央にに径0.18m程度の柱当りがある。深さは検出面から0.20mで10YR4/3にぶい黄褐色砂泥が堆積する。少量であるが平安京V期の前半の土師器皿が出土している。12世紀前半代の遺構と見ている。

#### **柱穴 54 (図版2の2・4の1、図10)**

4A～B区で検出。掘形は径0.38m程の円形で、中央には径0.20m程度の柱当りがある。深さは検出面から0.21mで10YR3/3暗褐色砂泥が堆積する。少量であるが平安京V期の土師器皿が出土している。12世紀代の遺構と推定している。

他に12世紀代の遺構としては柱穴33・39～41・45・46・52・62・70・82・83・92・126・127・133・143・148・155・156・158・159西・160西・161・169がある。

### **鎌倉時代**

鎌倉時代に入ると柱穴の他に土壙など大型の遺構も見られるようになる。

### **土壌 26 (図版2の2・4の1、図10)**

調査区の中央部で検出。東側大半が攪乱で、南側で土壌24に切られているため全景は不明であるが、南北約6.8m以上、東西2.8m以上ある。深さは0.30mほどあり10YR3/2黒褐色砂泥と径1~2cm程の礫と炭・焼土が微量に混じる土が堆積する。京都VI期新の土器類が出土し、13世紀中頃の遺構と見られる。

### **土壌 91 (図版2の2・4の1・5の7、図10)**

5C区で検出。東西方向に1.87m、南北幅0.50~0.55mを測り東西方向に細長い土壌で主軸が東で割付軸に対し約8°南へ振れる。深さは0.30mあり、底部は平らで堆積土は4層ある。上から10YR4/3にぶい黄褐色砂泥に炭・焼土・土師器・陶器片含み、径1~3cm礫少量混ざった土、その下に10YR5/4にぶい黄褐色砂泥に炭が少量混ざった土層、その下に10YR3/2黒褐色砂泥で炭・焼土が微量に混じった土、そして最下層に10YR4/4褐色砂泥、炭・焼土が微量に混ざった土が堆積する。京都VI期前半の土器類が出土しており、13世紀前半の遺構である

### **柱穴 36 (図版2の2・4の1・5の3、図10)**

4A区で検出。6~7cm掘り下げた時点で土師器の皿の完形品を検出した。皿は正位置に置かれており、さらに3~4cm掘り下げると0.12×0.16m程の大きさの根石があった。おそらく建物放棄時に行った祭祀であろうと思われる。深さは0.25mあり、上層は10YR3/3暗褐色砂泥、下層は10YR4/4褐色砂泥が堆積していた。土師器皿は京都VI期新のもので、13世紀中頃のものと見てている。

他に鎌倉時代の遺構は土壌32・81・112、柱穴49・86南・93~95・113・122・134・142・145・190などがある。

### **室町時代**

土壌や柱穴がある。

### **柱穴 119 (図版2の2・4の1・5の4、図10)**

6B区で検出。周囲を他の柱穴で切られており推定の径は0.32m。0.20×0.28m程の根石をもち掘形の深さは0.21mである。10YR4/2灰黄褐色砂泥が堆積する。京都VIII~IXくらいの土器が出土しており14世紀後半~15世紀くらいの遺構と考えている。

### **柱穴 120 (図版2の2・4の1・5の4、図10)**

5~6B区で検出。掘形の径は0.39×0.50mで、検出面に近い位置で0.19×0.22m程の根石を検出した。さらにこの根石の下、検出面から0.15mのところでも0.12×0.18m程の根石があり建物の立て替えがあったと理解できる。掘形の深さは0.26mで、10YR5/3にぶい黄褐色砂泥が堆積する。14世紀後半~15世紀くらいの遺構と考えている。

### **土壌 137 (図版2の2・4の1、図10)**

5C区で検出。掘形の径は東西1.02m、南北は0.80mで深さは検出面から0.66mを測る。西側の壁面は大きくオーバーハンプングしていた。10YR4/2灰黄褐色砂泥が堆積し、京都IX~Xくらい

の遺物が出土。16世紀代の遺構と見ている。

他に室町時代前期から半ばくらいの遺構には土壙 68・124・165、柱穴 85・99・188・121・157・162・164・173・187 がある。室町時代半ばから後期のものには土壙 23・30・50・75・77・78・89・90・107・123・130、柱穴 29・48・69・79・86・88・97・126・132・138・152・176 がある。

### 桃山時代

**濠 21** (図版 2 の 1・3 の 1 と 2、図 9・11)

調査区の東半部で南北方向の濠を検出。濠幅は 4.7 ~ 4.9m で、大走りも含めた幅は 6.5 ~ 6.9m、深さ 2.2m ~ 2.4m を測る。底部から 0.8 ~ 1.0m 辺りで水があった痕跡が濠壁面に確認できる。京都 X 期新くらいの土器類が出土している。

**土壙 22** (図版 2 の 1、図 9)

調査区南部で検出。幅は 1.0 ~ 3.0m と一定でなく東西に長い凹みである。10YR4/3 にぶい黄褐色砂泥が堆積する。

他に桃山時代の遺構としては土壙 25・37・140・141 などがある。

### 江戸時代以降

**溝 13** (図版 1 の 2、図 8)

調査区東部で南北方向に検出。幅は 1.5 ~ 2.5m、深さ 0.3 ~ 0.4m で 10YR3/4 暗褐色砂泥に径 1 ~ 20cm の礫が多く混じった土が堆積する。桃山時代の濠 21 の東肩とほぼ重なっている。江戸時代初頭頃の遺構と見ている。

**石組 15** (図版 1 の 2・5 の 1、図 8・12)

方形の石組の最下段部分が一部残存していた。石材はすべて花崗岩である。石組内には 10YR3/3 暗褐色砂泥が堆積する。

江戸時代の遺構は他に、井戸 1・3、土壙 10・12・17、柱穴 180 がある。

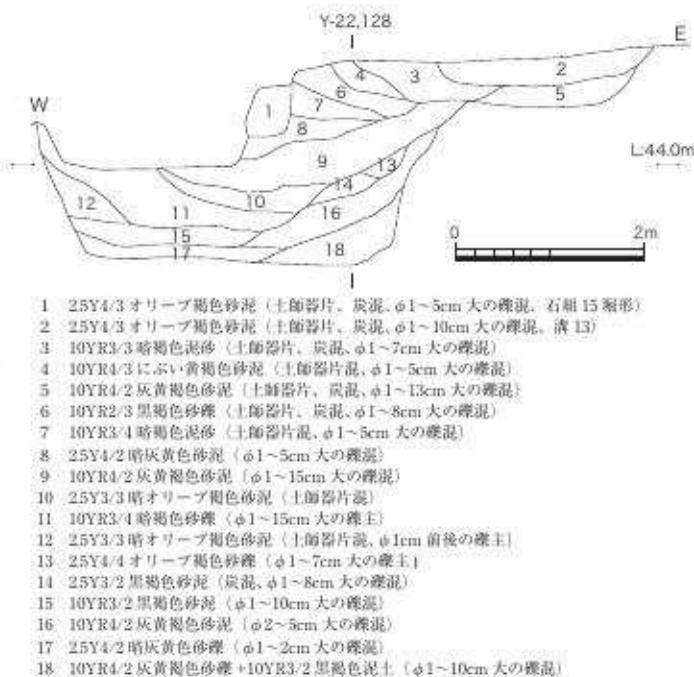


図 11 濠 21 中央セクション実測図 (1/80)

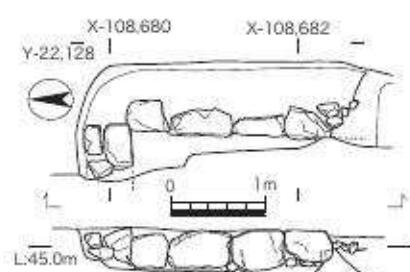


図 12 石組 15 実測図 (1/80)

## IV 遺 物

出土遺物は整理箱にして37箱ある。なお、時代区分は平安京の土器編年をもとにおこなう。

### 土器・陶磁器類

#### 井戸 56 (図版6、図13)

土師器皿A(1~8)、同皿N小(9~13)、同皿N大(14~21)、同甕(22)、須恵器甕(23)、瓦器椀(24~26)、灰釉陶器椀(27~30)、輸入白磁蓮弁文椀(31)、同玉縁椀(32·33)がある。22の体部外面は粗いハケの後ナデ。内面、口縁内外面ともナデて仕上げる。31の白磁蓮弁文椀は京域でも出土例の少ないものである。平安京IV期後半の遺物群と見ていく。

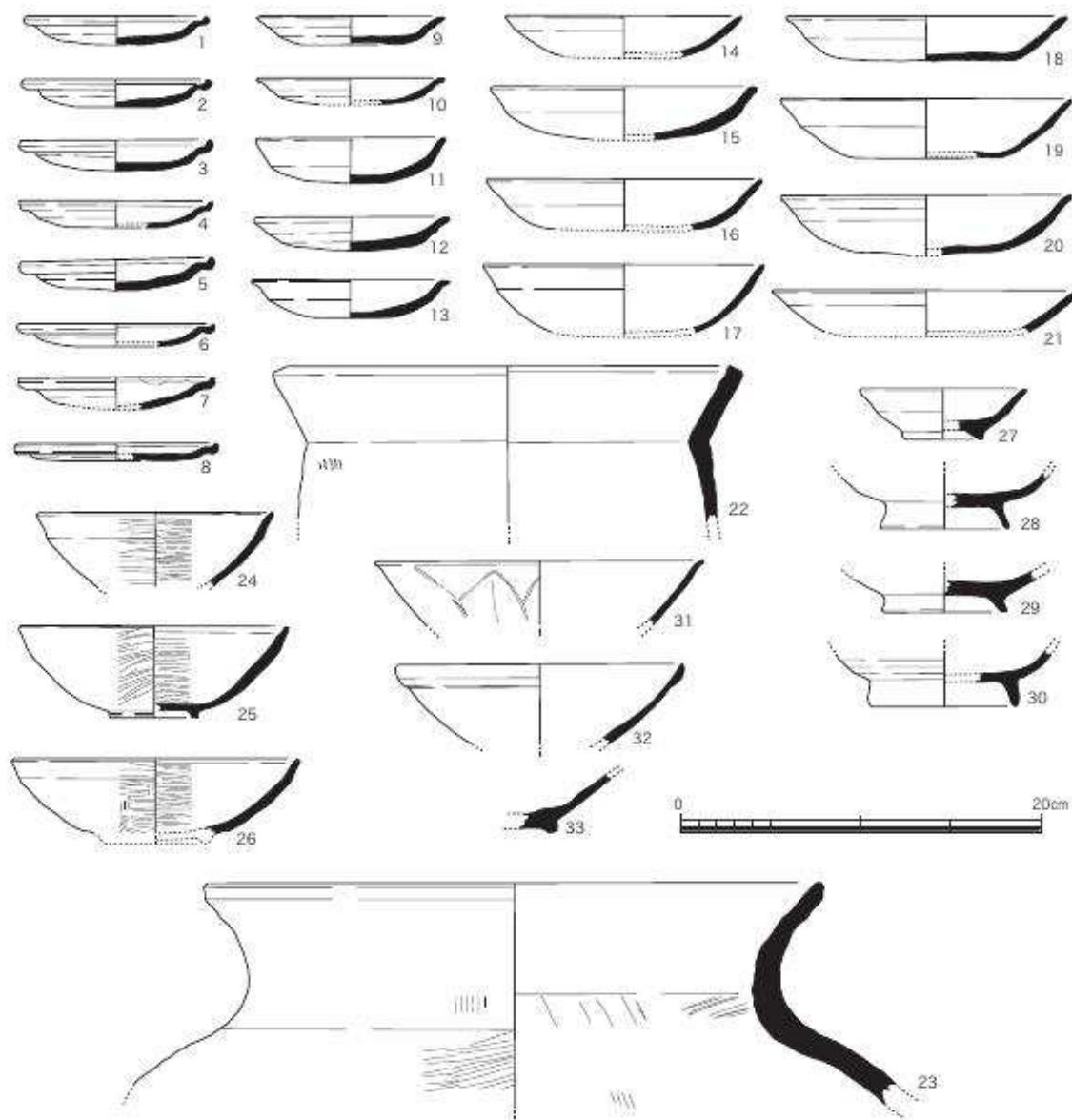


図13 井戸56出土土器実測図 (1/4)

### 柱穴 184 出土土器 (図版 6、図 14)

柱穴 184 からは輸入白磁皿 (34) が出土している。内面にクシで文様を描く。他の出土遺物から見ると 11 世紀後半から 12 世紀前半代の遺物と見られる。

### 柱穴 36 出土土器 (図版 6、図 15)

土師器皿 N 大 (35) が出土している。柱穴の上部に正位置で据えられていたもので形態的特徴から京都 VI 期新に属する土師器皿と見ている

### 濠 21 出土土器 (図版 7、図 16)

土師器皿 Sb (36 ~ 42)、同皿 S (43 ~ 51)、美濃瀬戸系天目椀 (52) 同灰釉丸皿 (53)、同灰釉卸目皿 (54)、焼締陶器信楽播鉢 (55)、同備前播鉢 (56)、輸入青磁椀 (57・58) がある。京都 X 期新に位置づけられると考えている。濠 21 は旧二条城内郭西限濠と考えている。文献(言継卿記)によると天正 4 (1576) 年「公方の御城にし堀、上京衆に申し付け、之を埋む」とあり 1576 年に西堀(外郭か内郭か不明であるが)を埋め始めたことがわかる。どういうふうに埋まったのかはわからないが、それほど長期間かかったとは思われずその年代からさほど離れた土器群とは思われない。輸入青磁椀は古手のものの可能性が高い。



図 14 柱穴 184 出土土器  
実測図 (1/4)

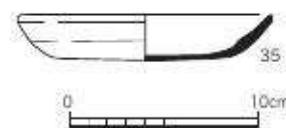


図 15 柱穴 36 出土土器  
実測図 (1/4)

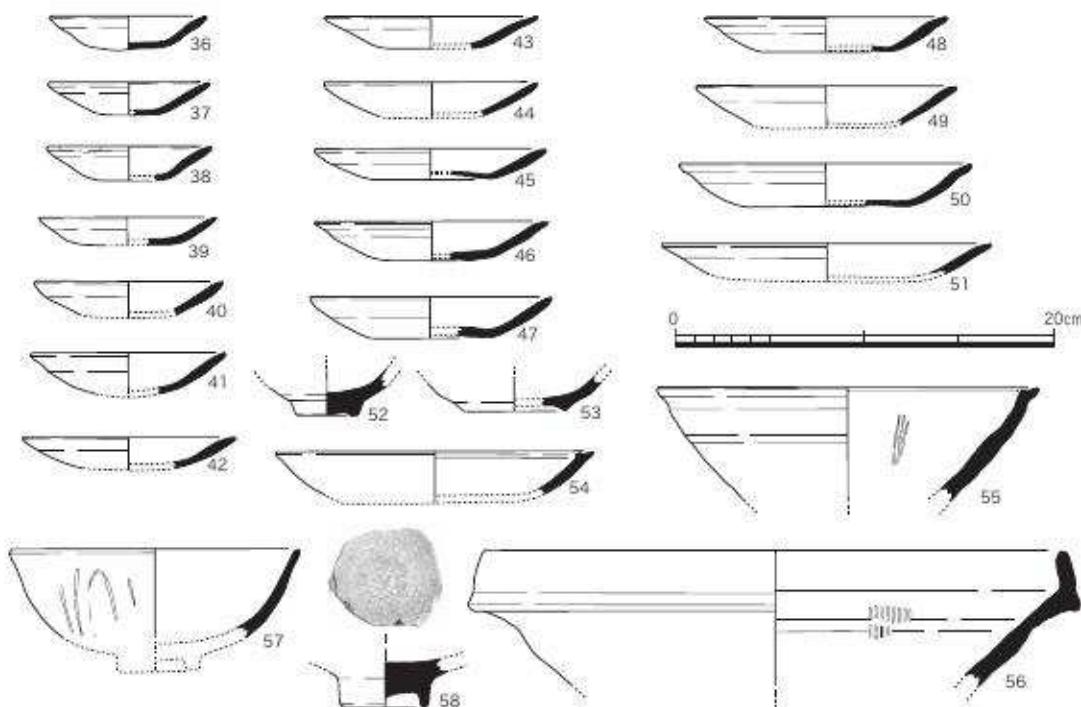


図 16 濠 21 出土土器実測図 (1/4)

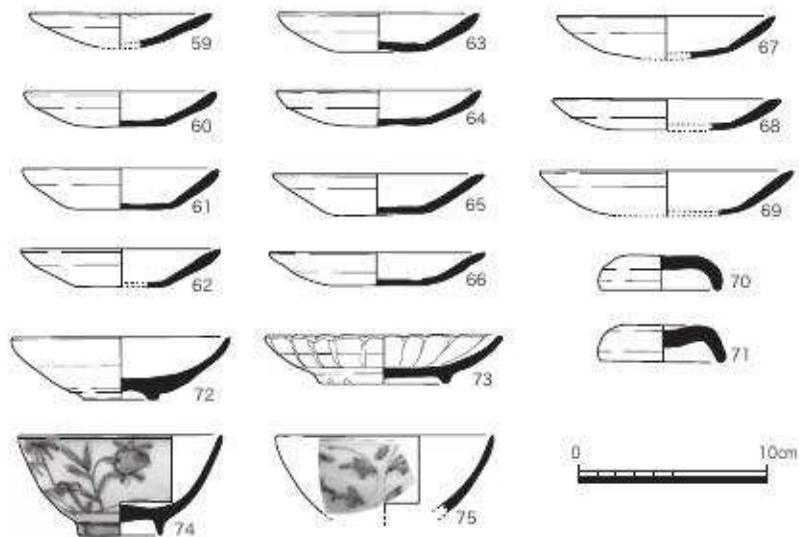


図17 井戸1出土土器実測図 (1/4)

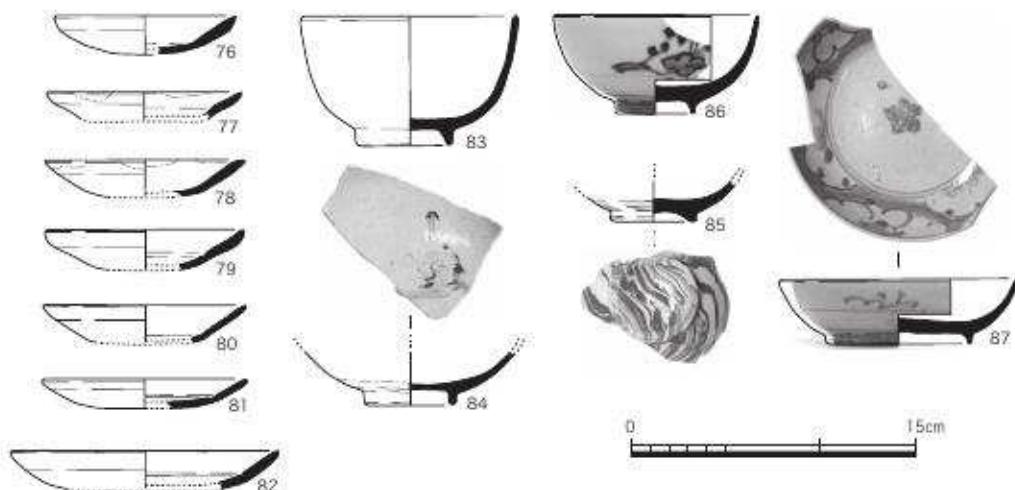


図18 井戸3出土土器実測図 (1/4)

#### 井戸1出土遺物 (図版8、図17)

土師器皿Sb (59)、同皿S (60～69)、同塙壺蓋 (70・71)、国産陶器唐津皿 (72)、同美濃瀬戸志野菊皿 (73) 伊万里染付磁器椀 (74・75) がある。京都XI期新くらいかと見ている。17世紀半ば頃の土器群と見ている。

#### 井戸3出土遺物 (図版8・9、図18)

土師器皿S (76～82)、京焼風肥前陶器椀 (83・84)、京焼系陶器交胎椀 (85)、伊万里染付磁器椀 (86)、同皿 (87) がある。84は内面に山水文を施す。このタイプのものは高台内にスタンプがあるものが多いが本個体については捺されていない。18世紀後半を前後する時期の土器群と見ている。

瓦類（図版9、図19）

緑釉単弁四葉蓮華文軒丸瓦（88）

いわゆる一本造りの緑釉が施された軒丸瓦である。瓦当裏面には布目が残る。胎土は5YR5/4にぶい赤褐色～5YR5/6明赤褐色を呈し、砂粒を多く含む。緑釉は5GY5/6暗黄緑色に発色。井戸56から出土した。

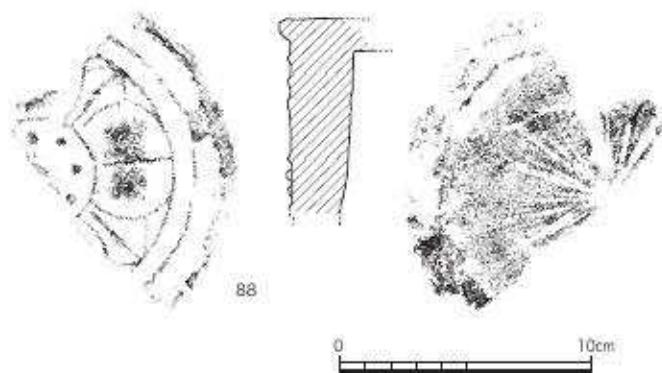


図19 出土瓦拓影・実測図（1/3）

石製品（図版9、図20）

石帶鎧具・鉈尾<sup>89</sup>（89）

濠21より古手の混入品として出土したもので、表面は丁寧に磨いて仕上げられている。

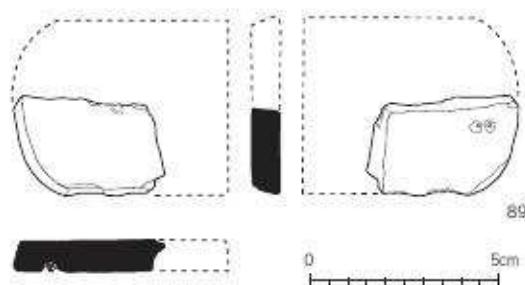


図20 出土石製品実測図（1/2）

表1 遺物概要表

時代	内容	コンテナ数	Aランク点数	Bランク箱数	Cランク箱数
平安時代	土師器、須恵器、黒色土器、灰釉陶器、白色土器、輸入陶磁器、瓦		土師器22点、須恵器1点、瓦器3点、灰釉陶器4点、輸入白磁4点、軒先瓦1点、石帶（鉈尾）1点		
鎌倉時代	土師器、須恵器、瓦器、焼締陶器、輸入陶磁器		土師器1点		
桃山時代以降	土師器、国産施釉陶磁器、焼締陶器、瓦器、輸入陶磁器、瓦		土師器36点、国産陶磁器12点、焼締陶器2点、輸入陶磁器2点		
合計		39箱	89点（2箱）	37箱	0箱

\* コンテナ箱数の合計は、整理後、Aランクの遺物を抽出したため、出土時より2箱多くなっている。

## V 小 結

平安時代の柱穴や、11世紀頃に埋められている井戸跡、中世の土壙・柱穴なども見つかっているが、建物など並びが確認出来るものは見つかっていない。最も古い遺構は9世紀後半から10世紀前半の柱穴があり、10世紀代の柱穴も数基認められた。鎌倉時代に入ると柱穴の他、土壙 26・32・81・91 といった柱穴より大型の遺構も見られるようになる。おそらく土地利用の内容が変化したものと思われる。室町時代に入っても根石をもつ柱穴や土壙が認められ、都市機能が継続されていたと理解できる。

16世紀後半には織田信長が最後の室町幕府(第15代)将軍足利義昭のために作った「旧二条城」が存在したことが知られている。1970年代後半、地下鉄烏丸線建設時の調査で、出水、下立壳、榎木町、丸太町上ルの4ヶ所で石組のある濠が見つかっており、石材として石仏も多数使われていた状況が明らかとなった。当時のボルトガルの宣教師ルイス・フロイスが書き残した信長築城の様子と合致し、初めての旧二条城の遺構の発見となった。<sup>註10</sup>

当調査でも南北方向の大規模な濠が発見された。位置的に見ると旧二条城の内郭の濠と考えられ、濠底部の標高も烏丸下立壳で見つかっている濠とほぼ同じ(約42.8mT.P.)で出土遺物からも旧二条城の遺構と見てよいものである。深さ約1mくらいの水をたたえていたものと見られる。この濠と接続していると思われる榎木町の濠はさらに1m深く水深は約2mほどと推定できる。<sup>註11</sup> 旧二条城外郭は南北約380m、東西約390m程で復元されており、これによって内郭は南北約160m、東西約200m程に復元できる。<sup>註12</sup>

しかし、烏丸線建設に伴う調査では4ヶ所とも石垣を伴っているが今回の調査地点の濠にはそういう施設は見当たらぬ。石像物の一体も出土していない。

「老人雜話 乾」によると、「室町武衛陣に城を築きて昌山(足利義昭)をすへらる。今の武衛陣、東かハ石垣也。西かわハ町屋也。家中の武士ハ、面々に屋敷を構えよとの事なれば本国寺の宿坊をミナ引取りて家居とせり。」とあり東側と西側とでは様相が大きく異なる可能性がある。<sup>註13</sup>



図21 旧二条城推定復元図 (1/5,000)

「老人雜話」は近世初期に成立した隨筆。儒医江村専齋（1565～1664）の談話を門人伊藤坦庵（宗恕）が筆録編集した書であるがその内容については疑問とされる部分も多いとされる。しかし、専齋は、「…幼にして新在家に在り、十五にして平安に遊び…略…」と、旧二条城の北に接して東にあった新在家に生まれて育った。<sup>明14</sup> 専齋11歳の時、旧二条城は破却され姿を消した。小さい頃に見たこの情景については強烈に記憶に残っていたのではないかと想像する。

信長は、西側の「家中の武士」のいる部分については防御性能を高める必要はないと考えたのではないかと推察できる。70日間という短期間で築造が可能だった秘密はこの辺りにもあるのではないかと考える。

今回の調査では旧二条城内郭西限濠が明らかとなりその規模が推定出来るようになったことが最大の成果と言える。なお、調査終了後埋め戻したのちに濠の確認調査を行い、X-108,660m付近まではそのまま北へ延びていることを確認した。

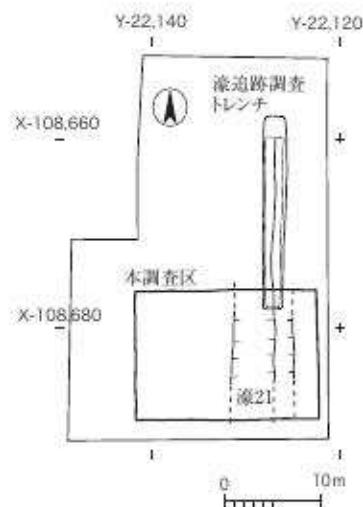


図22 濠21の追跡調査(1/800)

- 註1 「平安京提要」 編監修角田文衛 角川書店 1984年
- 註2 「京都の歴史3 近世の胎動」 京都市 学芸書林 1968年
- 註3 「史料京都の歴史7 上京区」 京都市 平凡社 1980年
- 註4 「フロイス日本史 五畿内篇II」 松田毅一・川崎桃太郎 中央公論社 1981年
- 註5 註3に同じ
- 註6 「京都市文化財ブックス20集 京の城-洛中・洛外の城館-」 京都市文化市民局文化部文化財保護課 2006年
- 註7 小森俊寛・上村憲章「京都の都市遺跡から出土する土器の編年」「研究紀要第3号」(財)京都市埋蔵文化財研究所 1996年。土師器の型式名称もこれに従った。
- 註8 註7に同じ
- 註9 平尾政幸「平安京の石製鈎具とその生産」「研究紀要第7号」(財)京都市埋蔵文化財研究所 2001年
- 註10 a 京都市高速鉄道烏丸線内遺跡調査年報I 1974・75年度 京都市高速鉄道烏丸線内遺跡調査会 1980年  
b 京都市高速鉄道烏丸線内遺跡調査年報II 1976年度 京都市高速鉄道烏丸線内遺跡調査会 1981年  
c 京都市高速鉄道烏丸線内遺跡調査年報III 1977～81年度 京都市高速鉄道烏丸線内遺跡調査会 1982年
- 註11 註10-bに同じ
- 註12 註6に同じ
- 註13 「老人雜話」「雜史集」 統国民文庫 国民文庫刊行会 1912年 「信長城を武衛陣に築き、公方をすえて慶賀の能あり。老人も四歳ばかりにて、乳母に抱かれて見物す。」と述べている。信長と義昭は上洛直後は本国寺に陣を置いた。
- 註14 東洋琴台「先哲叢談(後編)卷一」 国史研究会 1916年

表2 掘載土器一覧表

口径・器高の単位はcm

番号	種類	器形	口径	器高	色調、特徴	造構・層名	実測番号
1	土器器	III A	19.4	1.6	粘土 10YR7/3 にぶい黄橙色、φ 0.5 ~ 2mm 程度の砂粒含む。	井戸 56	4
2	土器器	III A	10.6	1.5	粘土 10YR7/3 にぶい黄橙色。	井戸 56 セク第2層	3
3	土器器	III A	10.8	1.8	粘土 10YR7/3 にぶい黄橙色、φ 1mm 程度の砂粒含む。	井戸 56 最上層	1
4	土器器	III A	10.8	1.5	粘土 10YR7/4 にぶい黄橙色、φ 1mm 程度の砂粒含む。	井戸 56 セク第2層	6
5	土器器	III A	10.9	1.7	粘土 10YR7/3 にぶい黄橙色、φ 1mm 程度の砂粒含む。	井戸 56 セク第1層	2
6	土器器	III A	11.0	1.3	粘土 7.5YR7/6 橙色。	井戸 56	7
7	土器器	III A	11.0	(1.8)	粘土 10YR7/4 にぶい黄橙色。	井戸 56 セク第1層	8
8	土器器	III A	11.4	1.0	粘土 10YR7/4 にぶい黄橙色、φ 1 ~ 3mm 程度の砂粒含む。口縁一部煤付着。	井戸 56 最上層	5
9	土器器	III N 小	10.4	1.6	粘土 10YR7/3 にぶい黄橙色。	井戸 56 最上層	9
10	土器器	III N 小	10.5	(1.5)	粘土 7.5YR7/4 にぶい黄橙色。	井戸 56 セク第2層	11
11	土器器	III N 小	10.6	2.5	粘土 10YR7/3 にぶい黄橙色、φ 1 ~ 2mm 程度の砂粒含む。	井戸 56 セク第1層	14
12	土器器	III N 小	10.9	1.9	粘土 10YR7/2 にぶい黄橙色。	井戸 56 セク第1層	12
13	土器器	III N 小	11.0	2.1	粘土 10YR7/3 にぶい黄橙色。	井戸 56 最上層	10
14	土器器	III N 大	13.2	(2.2)	粘土 2.5Y7/2 灰黄色。	井戸 56 下層	19
15	土器器	III N 大	14.8	(3.0)	粘土 7.5YR7/6 橙色。	井戸 56 最上層	13
16	土器器	III N 大	15.4	(2.8)	粘土 10YR7/4 にぶい黄橙色、φ 1mm 程度の砂粒含む。	井戸 56 セク第2層	18
17	土器器	III N 大	15.6	(3.8)	粘土 10YR7/2 にぶい黄橙色。	井戸 56 セク第4層	16
18	土器器	III N 大	15.6	2.4	粘土 2.5Y7/3 浅黄色、φ 1 ~ 5mm 程度の砂粒含む。	井戸 56 最上層	21
19	土器器	III N 大	16.2	(3.3)	粘土 2.5Y7/3 浅黄色、口縁内外面煤付着。	井戸 56	15
20	土器器	III N 大	16.2	(3.3)	粘土 10YR7/4 にぶい黄橙色、φ 1 ~ 2mm 程度の砂粒含む。	井戸 56 セク第3層	20
21	土器器	III N 大	17.2	(2.3)	粘土 10YR7/3 にぶい黄橙色、φ 1 ~ 2mm 程度の砂粒含む。	井戸 56 下層	17
22	土器器	甕	26.0	(8.8)	粘土 2.5Y5/2 暗灰黄色、ややくぼ φ 1 ~ 3mm 程度の砂粒含む。	井戸 56 最上層	22
23	瓦器	椀	13.1	(4.1)	粘土 N4/0 黑色。内外面ミガキ。	井戸 56 セク第2層	23
25	瓦器	椀	15.0	5.1	粘土 N5/0 黑色。高台は貼付け。内外面ミガキ。	井戸 56	25
26	瓦器	椀	16.0	(4.1)	粘土 5PB4/1 暗青灰色。内外面ミガキ。	井戸 56 最上層	24
27	灰釉	椀小	9.4	2.8	5Y7/1 灰白色。貼付高台。	井戸 56 セク第6層	26
28	灰釉	椀	—	(3.1)	2.5Y7/1 灰白色。貼付高台。	井戸 56	27
29	灰釉	椀	—	(2.5)	N7-0 灰白色。貼付高台。	井戸 56	28
30	灰釉	椀	—	(3.1)	2.5Y6/1 黄灰色。貼付高台。	井戸 56	29
32	輸入白磁	椀	16.0	(4.5)	2.5Y7/1 灰白色。口縁淡部を外側へ折り曲げて玉縁にする。	井戸 56 最上層	30
31	輸入白磁	椀	18.2	(3.5)	7.5Y8/1 灰白色。外面に蓮弁文を施す。	井戸 56 最上層	31
33	輸入白磁	椀	—	—	10Y7/1 灰白色。	井戸 56	32
34	須恵器	甕	31.2	(12.5)	SY5/1 黑色、φ 1 ~ 2mm 程度の砂粒含む。	井戸 56 下層	33
34	輸入白磁	甕	13.8	3.8	粘土 5Y7/1 灰白色、釉 7.5Y7/2 灰白色。	柱穴 184 上層	34
35	土器器	III N 大	13.5	2.4	粘土 10YR6/3 にぶい黄橙色、φ 1mm 程度の砂粒含む。	柱穴 36 古掘	35
36	土器器	III Sb	8.4	1.8	粘土 7.5YR8/4 浅黄橙色。	濠 21 セク南下層 2	36
37	土器器	III Sb	8.6	(1.8)	粘土 7.5YR8/4 浅黄橙色。	濠 21 セク南上層	40
38	土器器	III Sb	8.8	1.8	粘土 10YR8/3 浅黄橙色。口縁一部に煤付着。	濠 21 セク南最下層	38
39	土器器	III Sb	9.4	(1.5)	粘土 7.5YR8/4 浅黄橙色。	濠 21 セク南中層	39
40	土器器	III Sb	10.0	(1.8)	粘土 7.5YR8/3 浅黄橙色。	濠 21 セク南中層	41
41	土器器	III Sb	10.4	(2.1)	粘土 7.5YR7/4 にぶい橙色。	濠 21 セク北北層	37
42	土器器	III Sb	11.3	(1.7)	粘土 10YR8/3 浅黄橙色。	濠 21 セク面上層	42
43	土器器	III S	11.3	(1.7)	粘土 10YR7/3 にぶい黄橙色。	濠 21 セク南上層	46
44	土器器	III S	11.3	(1.8)	粘土 10YR8/2 灰白色。	濠 21 セク南下層 2	51
45	土器器	III S	12.2	(1.7)	粘土 10YR7/4 にぶい黄橙色。	濠 21 セク南上層	45
46	土器器	III S	12.4	(2.1)	粘土 7.5YR7/4 にぶい橙色、φ 1mm 程度の砂粒含む。	濠 21 セク南上層	44
47	土器器	III S	12.8	(2.9)	粘土 7.5YR8/4 浅黄橙色、φ 0.5 ~ 2mm 程度の砂粒含む。	濠 21 東肩	43
48	土器器	III S	12.8	(1.5)	粘土 10YR8/4 浅黄橙色。	濠 21 セク南上層	50
49	土器器	III S	13.8	(2.1)	粘土 10YR8/3 浅黄橙色。	濠 21 セク南中層	47
50	土器器	III S	15.5	(2.3)	粘土 10YR7/4 にぶい黄橙色。	濠 21 セク南下層 2	48
51	土器器	III S	17.5	(1.7)	粘土 10YR7/3 にぶい黄橙色。	濠 21 セク南最下層	49
52	美濃瀬戸	天日杓	—	(2.4)	粘土 3Y7/1 灰白色、釉 N2/0 黒色。	濠 21 セク北北層	52
53	美濃瀬戸	灰釉丸皿	—	(1.8)	粘土 N8/0 黑白色、釉 7.5Y6/2 灰オリーブ色。	濠 21 セク南上層	53
54	美濃瀬戸	灰釉鉢目皿	16.8	(2.3)	粘土 2.5Y7/2 灰黄色、釉 2.5Y6/3 にぶい黄色。	濠 21 セク南最下層	54
55	信楽	擂鉢	20.2	(6.1)	SYR6/6 橙色、φ 1 ~ 4mm 程度の砂粒含む。	濠 21 セク南上層	55
56	備前	擂鉢	32.3	(7.2)	7.5YR5/2 灰褐色、φ 1 ~ 2mm 程度の砂粒含む。	濠 21 セク南上層	56
57	輸入青磁	椀	15.4	(4.7)	粘土 N8/0 黑白色、釉 10Y5/2 オリーブ灰色。	濠 21 セク南上層	57
58	輸入青磁	椀	—	(2.6)	粘土 2.5Y8/1 灰白色、釉 7.5Y6/2 灰オリーブ色。	濠 21 セク南最下層	58
59	土器器	III Sb	9.7	(1.8)	粘土 7.5YR7/4 にぶい橙色。口縁一部に煤付着。	井戸 1	59
60	土器器	III S	10.2	1.8	粘土 10YR8/4 浅黄橙色。	井戸 1	63
61	土器器	III S	10.4	2.1	粘土 10YR7/4 にぶい黄橙色。	井戸 1	67
62	土器器	III S	10.6	(2.0)	粘土 10YR7/4 にぶい黄橙色。	井戸 1	68
63	土器器	III S	10.8	2.0	粘土 2.5Y8/2 灰白色。内外面一部に煤付着。	井戸 1	60
64	土器器	III S	10.8	1.9	粘土 10YR8/3 浅黄橙色。	井戸 1	64
65	土器器	III S	11.2	2.2	粘土 10YR8/3 浅黄橙色。	井戸 1	62
66	土器器	III S	11.4	1.8	粘土 10YR8/3 浅黄橙色。	井戸 1	61
67	土器器	III S	11.6	(2.3)	粘土 10YR8/4 浅黄橙色。	井戸 1	69
68	土器器	III S	12.2	(1.6)	粘土 10YR7/3 にぶい黄橙色。内外面一部に煤付着。	井戸 1	65
69	土器器	III S	13.4	(2.3)	粘土 10YR8/3 浅黄橙色。	井戸 1	66
70	土器器	埴壺蓋	6.6	1.8	粘土 7.5YR7/4 にぶい橙色、φ 1 ~ 2mm 程度の砂粒含む。	井戸 1	70

番号	種類	器形	口径	脚高	色調、特徴	遺構・層名	実測番号
71	土師器	壺取蓋	6.9	1.9	輪土 7.5YR8/4 淡黄褐色、φ 1 ~ 3mm 程度の妙粒含む。	井戸 1	71
72	唐津	皿	11.6	3.3	輪土 10YR6/4 にぶい黄褐色、釉 7.5Y5/2 灰オリーブ色。	井戸 1	72
73	美濃瀬戸	志野菊皿	12.6	2.6	輪土 2.5Y8/2 灰白色、釉 5Y8/2 灰白色。	井戸 1	73
74	伊万里	染付梅	10.8	5.3	輪土 N8/0 灰白色、釉 7.5GY8/1 明緑灰色。	井戸 1	74
75	伊万里	染付梅	11.6	(41)	輪土 N8/0 灰白色、釉 7.5GY8/1 明緑灰色。	井戸 1	75
76	土師器	皿 S	9.7	(20)	輪土 10YR8/2 灰白色。	井戸 3	76
77	土師器	皿 S	10.4	(1.5)	輪土 2.5Y7/3 淡黄色。口縁の一部に煤付着。	井戸 3	81
78	土師器	皿 S	10.6	(2.0)	輪土 10YR8/3 淡黄褐色。口縁の一部に煤付着。	井戸 3	77
79	土師器	皿 S	10.6	(2.1)	輪土 7.5YR6/6 褐色。	井戸 3	78
80	土師器	皿 S	10.8	(2.0)	輪土 10YR8/3 淡黄褐色。	井戸 3	80
81	土師器	皿 S	10.9	(1.5)	輪土 10YR7/4 にぶい黄褐色。	井戸 3	79
82	土師器	皿 S	14.2	(2.0)	輪土 7.5YR7/4 にぶい橙色。	井戸 3	82
83	京焼鳳凰 前陶器	楕	11.5	6.8	輪土 2.5Y8/2 灰白色、釉 2.5Y7/3 淡黄色。	井戸 3	83
84	京焼鳳凰 前陶器	楕	—	(2.0)	輪土 2.5Y8/2 灰白色、釉 2.5Y8/3 淡黄色。	井戸 3	84
85	京焼系文 前陶器	楕	—	(2.2)	2.5Y8/3 淡黄色の土と 10YR4/3 にぶい黄褐色の土を練り合わせる。	井戸 3	85
86	伊万里	染付梅	10.9	5.2	輪土 N8/0 灰白色、釉 7.5GY8/1 明緑灰色。	井戸 3	86
87	伊万里	染付皿	14.8	3.4	輪土 N8/0 灰白色、釉 7.5Y7/1 灰白色。	井戸 3	87

※「セク」は「セクション」の略

## 報告書抄録

ふりがな	へいあんきょうさきょういちじょうさんほうろくちょう・きゅうにじょうじょうあと							
書名	平安京左京一条三坊六町・旧二条城跡							
副書名								
卷次								
シリーズ名								
シリーズ番号								
編著者名	上村憲章							
編集機関	古代文化調査会							
所在地	〒 658-0032 神戸市東灘区向洋町中1丁目4番地 125-1404							
発行年月日	2012年9月30日							
ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
平安京左京 一条三坊六 町・旧二条 城跡	京都府上京区 下立売通西入 東立売町209 番地	26100		35 度 01 分 12 秒	135 度 45 分 27 秒	2012.05.14 ～ 2012.07.14	260.55 m <sup>2</sup>	マンション 建設
所収遺跡	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項			
平安京左京 一条三坊六 町・旧二条 城跡	都城跡・城郭跡	平安時代～江戸 時代	柱穴、土壙、井 戸、濠、溝、石 組	土師器杯・皿・ 甕、須恵器杯・ 鉢・壺・甕、綠 釉陶器碗・皿、 灰釉陶器碗・皿、 黒色土器碗・皿・ 甕、瓦器碗、國 產陶磁器碗・皿、 輸入陶磁器碗・ 皿、瓦類				旧二条城内郭西 限濠の一部を確 認した



# 図 版





1 調査地近景（北東から）



2 第1面全景（北東から）



1 第2面全景（北東から）



2 第3面全景（北東から）



1 濟 21 (北から)



2 濟 21 (南から)



1 第3面西部（北東から）



2 井戸 56（西から）



1 石組 15 (南西から)



2 溝 13 (南から)



3 柱穴 36 (北から)



4 柱穴 119 (前)・120 (奥) (南から)



5 柱穴 34 (南から)



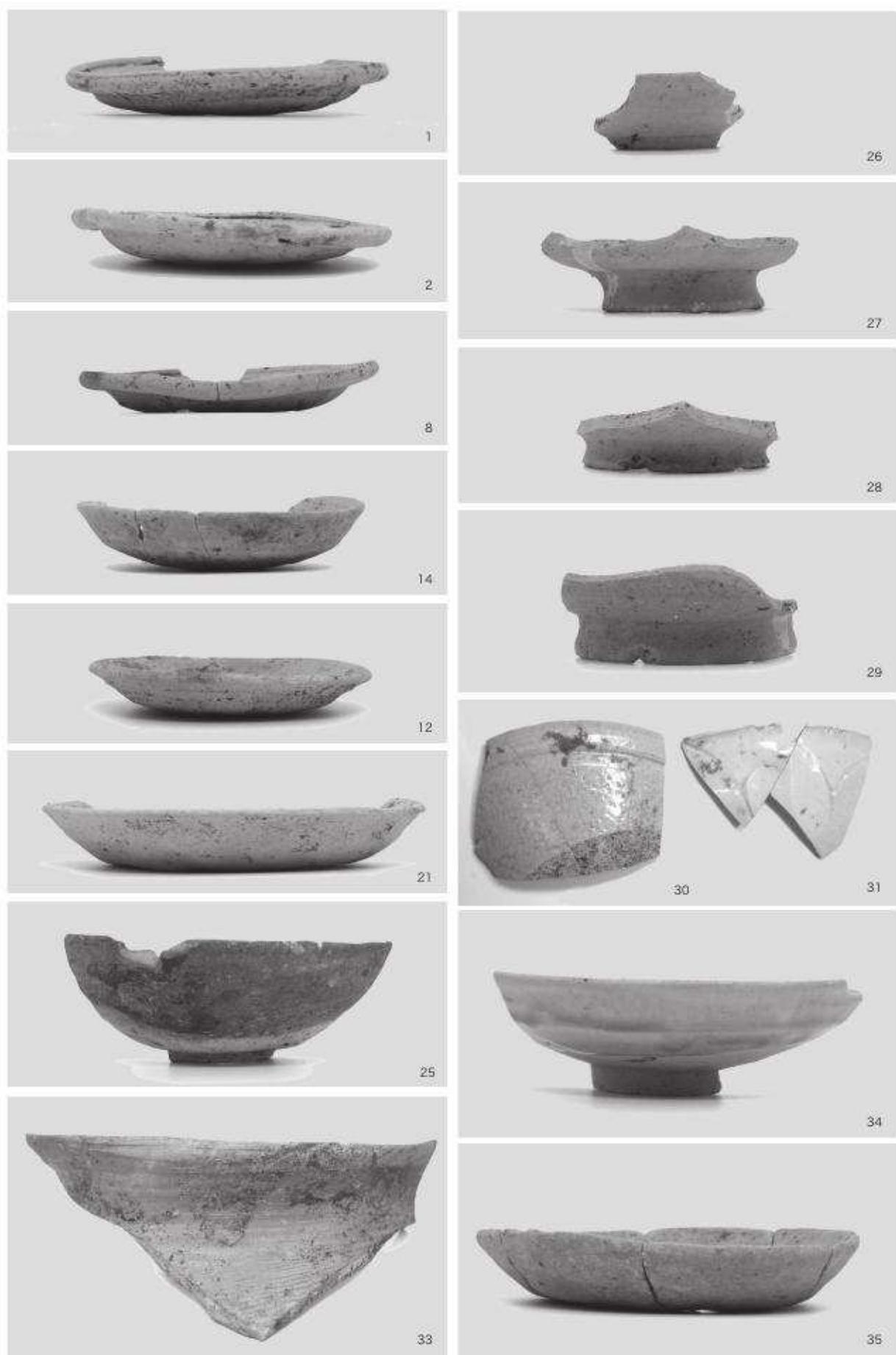
6 柱穴 159 (南から)



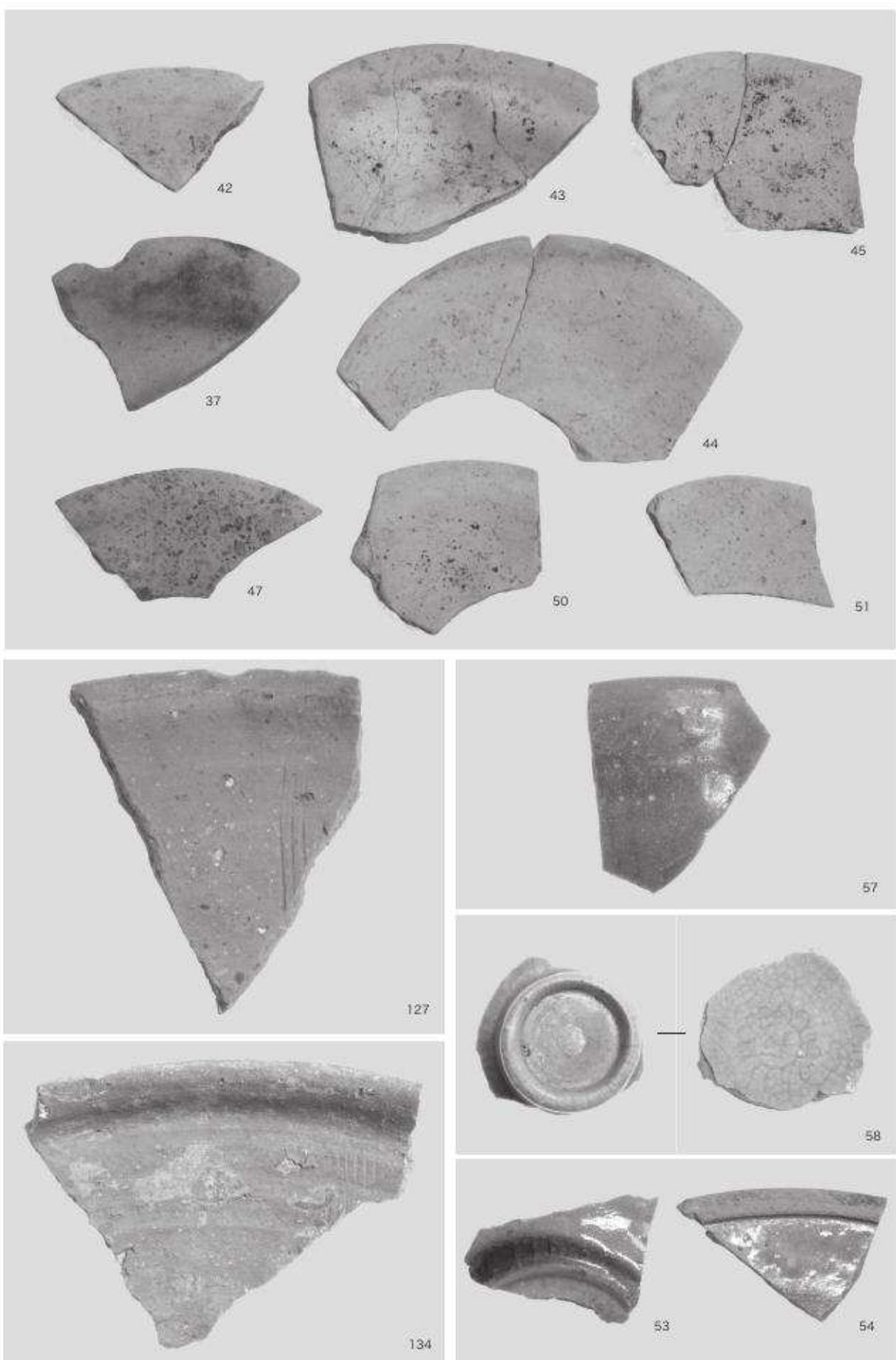
7 土壌 91 (北から)



8 現場説明会 7月2日 (南西から)



井戸 56 (1・2・8・12・14・21・26～31・33)・柱穴 184 (34)・柱穴 36 (35) 出土遺物



漆 21 出土遺物



井戸1（62・64・71～74）・井戸3（76～82）出土遺物



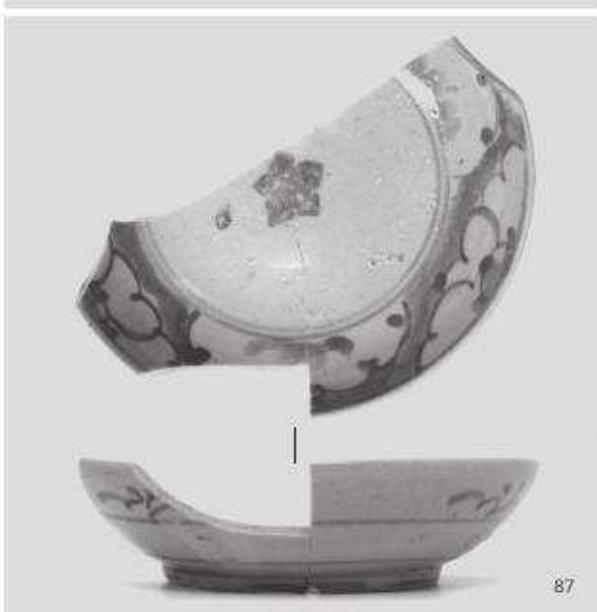
83



86



84



87



88



89

井戸 3 (83・84・86・87)・井戸 56 (88)・濠 21 (89) 出土遺物

## 平安京左京一条三坊六町 旧二条城跡

発行日 2012年9月30日

編集  
発行 古代文化調査会

住所 〒658-0032 神戸市東灘区向洋町中1-4-125-1404  
TEL (078) 857-6368

印刷 (有)京都編集工房  
〒612-0868 京都市伏見区深草直違橋南1-524-24  
TEL (075) 643-6978